



種もみ消毒と催芽

農業経営支援課 渡辺彰人

今年も苗の種子準備の時期がやってきました。いもち病、ばか苗病などの種子伝染病害は、未然に防ぐことが大切です。毎年の慣れている作業だからこそ、手順をもう一度確認し、良い苗をつくりましょう。

資材消毒

病原菌の繁殖を防ぐため、育苗箱等の資材は必ず消毒しましょう。ケミクロンGの1000倍液に10分間浸漬、500倍液に一瞬浸けるかジヨウウ口で散布した後、日光に充分に当てて乾燥させます。

塩水選

種子を食塩水または硫酸水につけると、稔実が悪いもみは浮き、充実したもみは沈みます。素早にかき混ぜた後、浮いたもみやゴミを取り除きます。購入した種もみでも行いましょう。塩水選後は必ず流水でよく洗ってください。

塩水選の濃度(水10ℓあたり)

種別	うるち	もち
比重	1.10	1.06
並塩	1.55kg	0.90kg
硫酸	1.98kg	1.10kg

種もみ消毒(田植え1カ月前)

薬剤侵透効果を高めるため、目の粗い袋に7分目程に詰めた後、テクリードCフロアブル(200倍)にスミチオン乳剤(1000倍)を加え、種子消毒を行います。種もみ1kg当たり2Lの薬液中で袋をよくゆすり、24時間浸漬したあと5〜24時間風乾させます。

浸種

水温は10〜15℃とし、水温積算温度(水温×日数)で100〜120℃(水温10℃で10〜12日間)を目安にします。酸素補給のため1〜2日おきに水を交換し、時々種もみをかくはんして水温や酸素吸収を均一化しましょう。低水温での浸種は発芽にムラが生じます。

催芽

浸種が終わったら水を入れ替えて催芽します。水温は28〜30℃とし、15〜20時間加温します。ハト胸のような状態になると、白い芽が1mm程度出てきます。